

アントウェルペンにおける近代的書物形態の 発展について

雪嶋 宏一

抄 録

低地諸州最大の商業都市アントウェルペンの近代的書物形態の発展過程についてページ付けと近代的標題紙の登場に着目して調査した。アントウェルペンでは1481年に活版印刷が開始され、15世紀末までに低地諸州第二の印刷都市となり、16世紀中に低地諸州最大の印刷出版中心地となり、ヨーロッパ第四の印刷出版都市に発展した。最初のページ付け本はバーゼルの影響を受けてヒレンが1519年に刊行したエラスムス『日常会話文例集』である（図1）。ページ番号はローマ数字で、番号の位置はアルドのAタイプである。しかし、16世紀前半にはページ付けはあまり発展しなかったが、16世紀後半にベレール、プランタン、シルウィウス等の登場により急速に広まった（表1）。特に、プランタンの貢献によってページ付け本は40%を超えるまでに増加した（図2、図3）。しかしながら、ページ付け本の比率は50%を超えることはなく、バーゼル、リヨン、ケルンに匹敵するような発展ではなかった。アントウェルペンでは、ページ付け本はカトリック書、聖書、神学書が中心となり、リプシウス等の例外はあるが人文主義書は全体的には低調であった（表3）。近代的標題紙は1519年刊行の最初のページ付け本に備えられており、その登場がバーゼルより早いことが判明した。アントウェルペンでは近代的標題紙は1530年以降に広まるが、奥書は16世紀末まで存続した。アントウェルペンにおけるページ付け本の判型をバーゼルとジュネーヴの判型のデータと比較した。八折判が圧倒的に多いのは共通するが、アントウェルペンでは十六折判と四折判が多く、十二折判も少なくない。一方、バーゼルは二折判、四折判が多く、十六折判等の小型の判型は少なく、ジュネーヴでは十六折判と二折判が多く、十二折判は少ない。このような差はページ付け本分野と出版の時期による違いが反映していると考えられる。

Summary

I discuss the development process of the modern book-form in Antwerp, the largest commercial city in the Low Countries, focusing on the development of pagination and the appearance of the modern title page. Letterpress printing began in Antwerp in 1481, and then Antwerp became the second printing city in the Low Countries until the end of the 15th century. Antwerp had grown into the largest printing center in the Low Countries and the fourth printing city in Europe during the 16th century. The first paginated book is Erasmus's *Familiarium*

colloquiorum formulae et alia quaedam, published by Hillen Hoochstraten in 1519 under the influence of Basel (Fig. 1). The page numbers were printed in Roman numerals and its position can be classified as the Aldo Type A. Although pagination did not develop much in the first half of the 16th century, it spread rapidly with the advent of Beller, Plantin, and Silvius in the second half of the 16th century (Table 1). Especially due to Plantin, paginated books exceeded 40% of books printed in Antwerp (Figs. 2 and 3). But the rate of paginated books did not exceed 50%, and the development of pagination in Antwerp was not comparable to the development in Basel, Lyon, and Cologne. In Antwerp, paginated books were mainly Catholic, Bible, and theological books, and with exceptions such as Lipsius, humanist books were generally minor (Table 3). The first modern title page in Antwerp was included in the first paginated book printed in 1519 (Fig. 1-1) earlier than in Basel. The modern title page became widespread after the 1530s, but colophon survived until the end of the 16th century. As to the formats of paginated books in Antwerp, there are many 16mo and 4to formats, and not a few 12mo. On the other hand, Basel has many folio and 4to formats, and few small formats such as 16mo format. Geneva has many 16mo and folio formats, and few 12mo formats (Tables 4-6). Such differences are thought to reflect differences between the field of paginated books and the time of publication.

1. はじめに

ヨーロッパにおける近代的書物形態の成立と発展過程についてはこれまで十分な研究は行われてこなかった。特に、近代的書物形態の重要な要素であるページ付けについては実証的な研究はほとんどなく、その発展過程については未だ十分に解明されていない。筆者はこの点に着目して、まずは16世紀の各地方の印刷出版中心地におけるページ付け印刷の発展過程を予備調査してその概要を発表した¹。この調査に基づいて、ページ付け印刷が始まったヴェネツィア²、ヴェネツィアの影響を受けてページ付け印刷が特に発展したバーゼル³、バーゼルの影響を受けてページ付け印刷が始まったリヨン、パリ⁴、ケルン⁵、そしてジュネーヴにおけるページ付け印刷の開始とその発展について調査を行った⁶。ページ付け印刷の調査と並行して近代的標題紙の出現とページ付け印刷本との結合についても調査を進めて、近代的書物形態の発展過程の解明を目指してきた。

以上のような研究目的と研究経緯に沿って、本稿では、2017年度の予備調査で16世紀後半にページ付け印刷の発展が看取された低地諸州のアントウェルペンにおけるページ付けの開始と発展過程および近代的標題紙の出現を調査して、近代的書物形態の発展過程を解明することを目的とする。

2. 研究方法

アントウェルペンにおけるページ付け印刷本の出版の推移を知るため、低地諸州（今日のオランダ、ベルギー、ルクセンブルクの地域 The Low Countries, Nederlanden）の16世紀印刷本の書誌情報を収録するデータベース Universal Short Title Catalogue (USTC)⁷を利用して、アントウェルペン印刷本の書誌情報を悉皆調査し、毎年の出版点数とその中に見出されるページ付け本の数

を算定した。USTCには対照事項の記述の欠落や不正確さが散見されるため、対照事項の記述が比較的詳細な1500-40年間の低地諸州印刷本書誌（以下NKと略）⁸により修正、補完した。そして、1541-1600年間のアントウェルペンの全印刷本の対照事項を含む詳細な書誌情報が未だ公開されていないため⁹、ベルギー王立図書館（Koninklijke Bibliotheek van België, Bibliothèque royale de Belgique）のOPACを利用して印刷出版者名や出版地‘Antwerpen’で検索して得られた書誌データに基づいてUSTCのデータを修正、補完した¹⁰。さらに、16世紀後半にアントウェルペン最大の印刷業者となったプランタン（Plantin, Christophe, 1520頃-1589）の出版書誌（1555-89年）¹¹とプランタン印刷所を継承したモレトス（Moretus, or Moerentorf, Jan I, 1543-1610）の出版書誌（1589-1610年）¹²を利用してUSTCの書誌データをさらに修正、補完した。

16世紀のアントウェルペンの印刷出版の特徴の一つは、ロンドン、レーフェン（ルーヴァン）、レイデン等の業者との共同出版が散見されることである。本研究では、共同出版の場合はアントウェルペンが筆頭出版地であるデータを採用した。また、政治的宗教的な理由から出版地を偽装したものも少なからず見られる。アントウェルペンで印刷されたことが判明している書物は、印刷された出版地名にかかわらずアントウェルペンの出版とした。その結果、16世紀のアントウェルペンの出版物14,976版のうち3,321版（22.18%）のページ付け本を確認することができた。なお、コロナ禍のため現地で現物調査ができなかったため、ページ付け印刷技術等の細部についてはUSTCがリンクを提供しているデジタル画像によって確認するほかはなかった。

3. アントウェルペンにおける活版印刷の開始

アントウェルペンは16世紀当時ヨーロッパ最大の国際商業都市であった。アントウェルペンが位置する低地諸州は1477年までフランスのブルゴーニュ家が支配していたが、その後徐々に神聖ローマ帝国のハプスブルク家の統治が進んでいった。

低地諸州における最初の活版印刷所は、ブリュッセル近郊のアールスト（Aalst, Alost）とユトレヒトで1473年に登場した。15世紀印刷本の総合目録データベースIncunabula Short Title Catalogue（ISTC）¹³によれば、アールスト最初の印刷業者はヨハネス・デ・ウェストファリア（Johannes de Westfalia, 1503頃没）とディルク・マルテンス（Martens, Dirk or Thierry, 1446-1534）である。ヨハネス・デ・ウェストファリアは翌年にはレーフェンに移って印刷活動を行ったため、マルテンスは単独で印刷所を経営して、1493年頃までにアールストで27版を刊行するが、アントウェルペンに移住したため、それ以降アールストでの印刷業は衰退した。

アントウェルペン最初の活版印刷所は1481年にフース（Goes, Mathias van der, 1492歿）によって開設された。フースはラテン語とオランダ語で神学書や教義書を中心に、アリストテレス等の古典も印刷した。ISTCでは101版が登録されている。しかしながら、ほとんどの版に奥書（colophon）を付けていないために刊行年不明の版が多い。15世紀アントウェルペンの中心的な印刷業者となったのは、1477年にゴータで印刷所を立ち上げ、1484年にアントウェルペンに移ったレーウ（Leeu,

Gerard) である。彼はラテン語の神学書や文法書、文学書、辞書、さらにオランダ語、英語、フランス語書等の多様な書物 150 版程をアントウェルペンで刊行した。

一方、上述のマルテンスは 1493 年にアントウェルペンに印刷所を移すが、1497 年にはレーフェンに赴き、その後再びアントウェルペンに戻って印刷業を行い、1512 年以降は再度レーフェンに移って活発な印刷活動を展開した。マルテンスはアントウェルペンで 1503 年にエラスムス (Erasmus, Desiderius, 1466-1536) の著作集を刊行すると、レーフェンでも引き続きエラスムスの出版元として活発な出版活動を展開した¹⁴。アントウェルペンでは 15 世紀中に 440 版以上が刊行され、デフェンテルに次いで低地諸州第二の印刷中心地に成長した。

4. 16 世紀におけるアントウェルペンの印刷出版業の発展

16 世紀前半のアントウェルペンでは 4,730 版が刊行され (USTC による)、低地諸州最大の印刷出版地に発展した¹⁵。その中心的な役割を果たしたのはヒレン・ファン・ホーホストラテン (Hillen van Hoochstraten, Michael, 1476?-1558) である (以降「ヒレン」と略)。彼は 1504 年にアントウェルペンで印刷業に就いて、1547 年まで印刷出版活動を行い、USTC によれば、神学書、教義書、教科書、エラスムス等の人文主義書、ギリシア・ローマ古典等 796 版を刊行した。

ルター (Luther, Martin, 1483-1546) の宗教改革がたちまちこの地に伝播する中で、パリで印刷業を営んでいたカイザー (Keyser, Merten de) が 1525 年にアントウェルペンに移住して、ルターやブーツァー (Bucer, Martin, 1491-1551) 等の宗教改革指導者の著作やエラスムスやコレット (Colet, John, 1467-1519) 等の人文主義者の著作を盛んに印刷した。その中にはティンダル (Tindale, Willyam. 1494 頃-1536) が英訳した『新約聖書』初版 (1534 年刊) が含まれていた。一方、1526 年から出版業を営んだグラフィウス (Grapheus, Joannes, 1502-1571) はカトリックの書物や神聖ローマ皇帝の勅書、さらにギリシア・ローマ古典を手掛けて、1569 年までに 390 版程を刊行した。1530 年から印刷業に携わったステールシウス (Steelsius, Joannes, 1500 頃-1562) は人文主義書、古典文献、カトリック書等のラテン語書を印刷し、1562 年までに 665 版を刊行して、ヒレンと双璧をなした。1536 年頃から 10 年間出版業を行ったクロム (Crom, Matthias, 1546 頃歿) は英語、オランダ語、ラテン語書を 80 版程刊行した。その中にはティンダル英訳『新約聖書』等の英書が多数含まれている。1538 年から 10 年間印刷業を行ったクリニトゥス (Crinitus, Joannes) はエラスムスやローマ古典等のラテン語文献ばかり 50 版程を刊行した。こうして、16 世紀前半にアントウェルペンで刊行された印刷本は、USTC の分野別統計に基づけば、宗教書が約 44%、教科書類 12%、聖書とギリシア・ローマ古典各 8% 程である。著者では、低地諸州出身のエラスムス (Erasmus, Desiderius, 1466-1536) が多いが、スペイン支配の関係でスペイン人も多い。本文言語ではラテン語が 51%、オランダ語が 31% であるが、フランス語、英語、スペイン語等も少なくない。

1543 年にハプスブルク家による低地諸州の支配が完了し、神聖ローマ皇帝カール 5 世 (Karl V., 1500-1558) が統治した。そして、ハプスブルク家とヴァロワ家との戦争が 1559 年のカトー・カン

ブレジ条約によって終結すると、低地諸州とフランスとの通行の安全が確保され、ジュネーヴからカルヴァン派が低地諸州南部に移住して勢力を増していった¹⁶。低地諸州は政治的権力を握るスペインとその支配に反乱を起こしたカルヴァン派との闘争に揺れ動き、1572年に北部の2州が独立を果たすと、北部はカルヴァン派が支配し、南部諸州はスペインの支配下にとどまった。

16世紀中葉にはアントウェルペンは人口10万人を擁する大都市であった¹⁷。USTCによれば、アントウェルペンでは16世紀後半の50年間で10,262版が刊行されており、パリ、ヴェネツィア、リヨンに次ぐヨーロッパ第4の印刷出版中心地に発展した。これらの出版物の約40%をプランタンとその後継者のモレトスが占めたことが大きな特徴である。プランタンは1589年に亡くなり、娘婿のヤン・モレトスが印刷所を継承し、プランタン印刷所の活動を継続した。プランタンとモレトスについては第7節で述べる。

アントウェルペンはスペイン軍の蹂躪でカルヴァン派がオランダに移住して人口が減少してしまい、商業の中心がアムステルダムへ移り、アントウェルペンは国際商業都市の地位を失ってしまった。そのため、出版業の中心もオランダに移動し、アントウェルペンの出版業は衰退して¹⁸、モレトスも出版数を減らしていった（図3参照）。

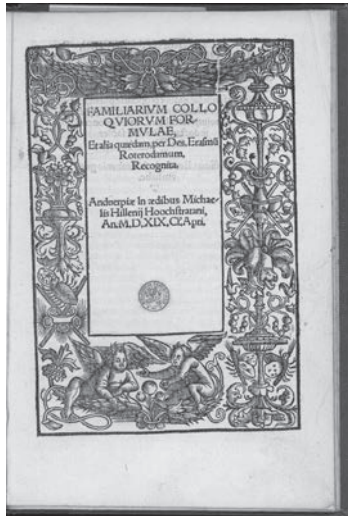
16世紀後半のアントウェルペンを代表するその他の印刷業者としては、リエージュ出身のジャン・ベレール（Bèllere, Jean, 1526-1595）が挙げられる。彼は1553年にアントウェルペン市民となり、出版業を始めたとされるが¹⁹、USTCでは彼の最初の印刷物は1550年刊行となっている²⁰。彼は兄弟のルカ2世（Bèllere, Lucas II, 1544-1609）とピエール（Bèllere, Pierre, 1530頃-1600）、さらにファレーズ（Phalèse, Pierre, 1510-1577）等と共同でラテン語、イタリア語、フランス語などで音楽書と宗教書を中心に610版刊行した。ジャン自身はラテン語やイタリア語をフランス語への翻訳も行っていた。また、ウィレム・シルフィウス（Silvius, Willem, 1521頃-1580）は1560年にアントウェルペンにおけるスペイン王の印刷家となり、国王の勅書やアントウェルペン市の布告、宗教書等350版程を刊行するが、1577年にレイデン大学から初代大学印刷家として招かれて²¹、オランダ語で低地諸州の布告等35版を刊行した。

16世紀後半のアントウェルペンで出版された著者は、キケロ（Cicero, Marcus Tullius, 前106-43）が112版、フェレプト（Verrept, Simon, 1522-1598）が107版、エラスムス95版、グラナダ（Granada, Luis de, 1504-1588）88版、リプシウス（Lipsius, Justus, 1547-1606）86版、ワレリウス（Valerius, Cornelius ab Auwater, 1512-1578）85版等が上位を占める。なお、ここにはプロテスタントの著者は見られない。むしろ、カトリック書、聖書および聖書各書、勅令・布告などが非常に多く印刷された。そのため、分野別では宗教書32%、勅令・布告等15%、音楽書、教科書、古典が続く。言語ではラテン語46%、オランダ語30%であり、フランス語が16%に増加した（USTCによる）。

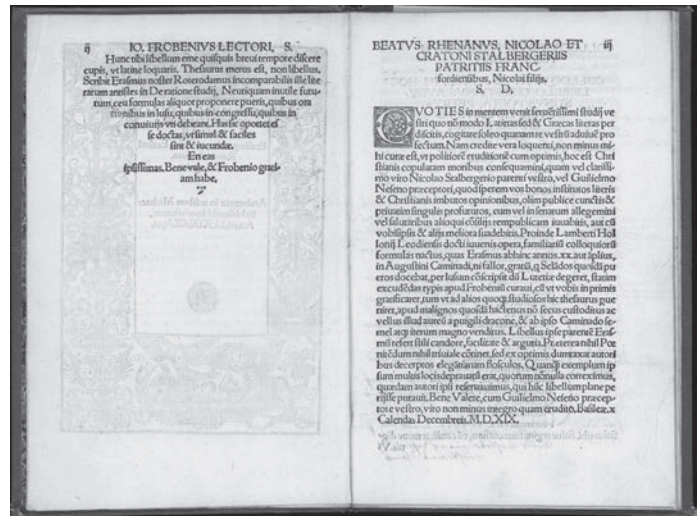
5. アントウェルペンのページ付け印刷の開始と発展

アントウェルペン最初のページ付け印刷本は1519年にヒレンがローマン体活字で印刷したエラスムス『日常会話文例集』（*Familiarium colloquiorum formulae et alia quaedam*. 4to）の3版（NK 792, NK 2867=USTC 452734²², NK 2868）である（図1）²³。これらの版は1518年にバーゼルのフローベン（Froben, Johann, 1460頃-1527）が著者に無断で刊行したページ付けした版に基づいたものである（VD 16, E 2301）²⁴。アントウェルペンの1519年版と1518年バーゼル版を比較すると、タイトルページは異なるが、タイトルページの裏面（アントウェルペン版ではp. ij, バーゼル版ではp. 2）にはフローベンがバーゼル版につけた読書への言葉（IO.FROBENIVS LECTORI, S.）がレイアウトは異なるものの、そのままコピーされている（図1-2左ページ）。そして、アントウェルペン版のp. iij-ivにはバーゼル版p. 3-4に掲載されたフローベン印刷所の編集者であるベアトウス・レナース（Beatus Rhenanus, 1485-1547）の序文がそのまま引き写されたおり（図1-2右ページ）、ヒレンがフローベン版を模倣したことは明らかである。つまり、アントウェルペンのページ付け印刷はバーゼルから伝播したことが判明する。両版ともページ番号の位置はアルドのAタイプが採用されている。バーゼル版はアラビア数字によるページ付けだが、アントウェルペン版はローマ数字であり、ページ番号に若干の誤植が認められる。この当時アントウェルペンではまだローマ数字の使用が一般的であったことがうかがわれる。

ヒレンは翌年にもエラスムス校訂『新約聖書』（*Novum Testamentum totum Erasmo interprete*.



1-1. 標題紙 (title page)



1-2. 左 (left) p. ij. 右 (right) p. iij.

図1 エラスムス『日常会話文例集』アントウェルペン, ヒレン, 1519年 (ハント大学図書館所蔵 BIB.ACC001339/14) Erasmus, Desiderius. *Familiarium colloquiorum formulae, et alia quaedam*. Antwerpen: in aedibus Michaelis Hillenij Hochstratani, 1519 (BIB.ACC001339/14). Courtesy Ghent University Library.

8vo) (USTC 437137, NK 2428) にローマ数字でページ付けを行った。本書も 1519 年フローベン刊行のエラスムス校訂『新約聖書』(Novum Testamentvm omne. VD 16, B 4197) に基づく版である。なお、フローベン版ではページ番号はアラビア数字であった。ヒレンは 1524 年刊行の『イソップ寓話集』(Fabularum. 8vo) (USTC 437248) で初めてアラビア数字を用いた。彼は 1544 年までにページ付け本を 34 版刊行した。ヒレンに続きカイザーが 1529 年に『イソップ寓話集』(AEsopi Phrygis et vita ex Maximo Planude desumpta et fabellae jucundissimae. 8vo) (USTC 437442) をローマ数字のページ付けで刊行した。彼は 1531 年刊行のブルンフェルス (Brunfels, Otto, 1488 頃-1534) 『聖書格言集』(Praecationes Bibicae [sic] sanctorum partum. 8vo) (USTC 403855, NK 501) ではアラビア数字でページ付けした。そして、グラフェウス (Grapheus, Johannes), ベルヘン (Berghen, Adriaen van), エールトセンス (Aertsens, Hendrik), フォルステルマン (Vorsterman, Willem), クリニトウス等がページ付け印刷に取り組み、1530 年代にはアラビア数字のページ付けが一般的となった。しかし、16 世紀前半にはページ付け本はアントウェルペン出版物全体の 10% 足らずであまり発展しなかった (図 2)。

アントウェルペンのページ付け印刷の実際の発展は 16 世紀後半である。この時代にまずはページ付け印刷に取り組んだのは上述のジャン・ベレールである。彼は 1595 年までに出版した印刷本の 14.92% にあたる 91 版をページ付けで刊行した。続いて 1555 年にプランタンが印刷所を開設して、1589 年までに 3,337 版を刊行し、そのうち 1,573 版 (47.14%) をページ付けで刊行した。1556 年にはシルフィウスがページ付けを開始して、81 年 (シルフィウス歿後) までに 350 版中 121 版のページ付け本 (34.57%) を刊行した。さらに、プランタン歿後の 1590 年代は彼の後継者モレトウ

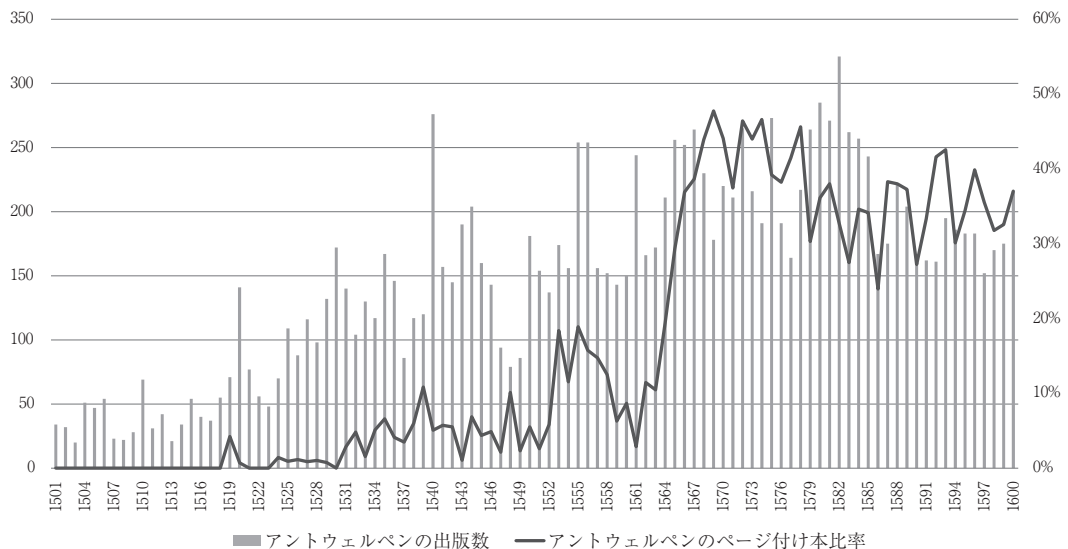


図 2 アントウェルペンの出版点数とページ付け本の比率

スがアントウェルペンのページ付け印刷の中心となった。その結果、アントウェルペンのページ付け本の比率は1564年にはまだ19.43%であったが、プランタンはじめその他の印刷業者がページ付けを採用したことで、1569年にはその比率が47.75%に上昇した。ページ付けの比率は1570年代には40%台、1580年代には30%台で推移した（図2）。しかし、16世紀末までページ付け本が50%を超えることはなく、バーゼル、リヨン、ケルンのような発展は見られなかった。

6. ページ付け印刷に積極的な印刷業者

アントウェルペンで積極的にページ付けを行った印刷業者を表1に示す。アントウェルペン最大の業者となったプランタンの出版数が圧倒的に多く、ページ付けの比率も47.14%である。次がプランタン印刷所（*Officina Plantiniana*）を継承したモレトゥスである。彼は1600年までのわずか10年で367版のページ付け本を刊行し、その比率も45.36%であり、プランタン同様にページ付け印刷に積極的に取り組んだ。続いてシルフィウスであり、アントウェルペンで刊行した版（ここにはアントウェルペンという刊記が表示されても実際にはレイデン版も若干含まれる）の34.57%に当たる121版をページ付けで刊行している。一方、ジャン・ベレールはページ付け本を91版刊行するが、その比率は14.89%と低かった。以降、ラーデ（*Rade, Gillis van den*, 1545頃-1615頃）とジャン・ベレールの兄弟のピエールが57版であり、ページ付け本の比率は40.43%であった。以上のように40版以上のページ付け本を刊行した業者のほとんどが16世紀後半に活動しており、この時代にアントウェルペンでページ付けが発展していたことの証左である。

次に、ページ付け本の比率順で印刷業者を表2に示すと、比率が最も高いのはトログナエシウス（*Troгнаesius, Joachim*, 1556頃-1624）である。彼は1580年に印刷所を立ち上げて、16世紀中に

表1 ページ付け本を多数刊行した業者（ページ付け版数40版以上）

印刷業者	出版活動期間	出版数	ページ付け印刷期間	ページ付け本版数	ページ付け本比率
Christophe Plantin	1555-1589	3,337	1555-1589	1,573	47.14%
Plantiniana (= Jan I Moretus)	1590-1600	809	1590-1600	367	45.36%
Willem Silvius	1556-1580	350	1556-1581	121	34.57%
Jean Bellère	1550-1595	611	1552-1595	91	14.89%
Gillis van den Rade	1555-1587	169	1555-1584	57	33.73%
Pierre Bellère	1565-1600	141	1572-1600	57	40.43%
Martinus II Nutius	1573-1600	181	1588-1600	52	28.73%
Arnould Coninx	1579-1600	104	1580-1600	49	47.12%
Joachim Troгнаesius	1580-1600	82	1585-1600	48	58.54%
Jan van der Loe	1541-1563	278	1543-1563	42	15.11%
Jan van Keerberghen	1563-1600	387	1591-1600	41	10.59%

表2 アントウェルペンでページ付け本の比率が高い印刷業者（30%以上）

印刷業者	ページ付け印刷期間	ページ付け本版数	ページ付け本比率
Joachim Trognaesius	1585-1600	48	58.54%
Joannes Crinitus	1539-1561	26	50.98%
Hubert Waelrant	1555-1558	35	47.30%
Christophe Plantin	1555-1589	1,573	47.14%
Arnout Coninx	1580-1600	49	47.12%
Plantiniana (= Jan I Moretus)	1590-1600	367	45.36%
Pierre Bellère	1572-1600	57	40.43%
vid. Jan van der Loe	1566-1569	9	36.00%
Willem Silvius	1556-1581	121	34.57%
Gillis van den Rade	1555-1584	57	33.73%
Daniel Vervliet	1580-1600	27	32.93%
Guislain Janssens	1589-1598	12	30.00%

はカトリック書等を82版刊行するが、そのうち58.54%をページ付けで印刷した。続いて16世紀前半から活動したクリニトゥスである。彼は16世紀中葉に全部で51版しか刊行していないので、ページ付けの比率が比較的50.98%と高くなる。続いて高い比率であるウエルラント（Waelrant, Hubert, 1517頃-1595）は音楽家・編集者であり、1555年から58年にかけて印刷業者レート（Laet, Hans de, 1524-1566）と組んで『詩篇歌』（Pseaulmes cinquante de David composeez musicalement）を編集して、音楽書には珍しくページ付けで刊行した。続いてプランタンであるが、彼については次節で取り上げる。次に、コニクス（Coninx, Arnould, 1548-1617）が続く。彼は前述の印刷業者ステールシウスの娘婿であり、1579年に印刷業者のギルドに入会が認められ、1580年からページ付けを採用して、47.12%に当たる49版をページ付けで刊行した。次のモレトゥスは次節で取上げる。その次が上記のピエール・ベレールである。以下は短期間だけページ付けを行ったヤン・ファン・デル・レーの後継者（vid. Jan van der Loe）、および上記のシルフィウスとラーデを除いてはいずれも出版数が少ない。

この表で明らかなように、アントウェルペンではページ付け本の比率が50%を超えていた業者はトログナエシウスとクリニトゥスだけである。つまり、アントウェルペン全体のページ付け本の比率が50%を超えることがなかった理由は、比率が著しく高い業者がおらず、各業者の比率が30~40%代で全般に低めだったからである。

7. プランタンとモレトゥスについて

プランタンはトゥール出身のフランス人である。彼は印刷術と製本をリヨンで学び、1545年頃にパリで修業を終えたが、プロテスタントへの迫害に恐怖を感じて1548年にアントウェルペンに

移住した。彼は1550年にアントウェルペンで市民登録され、1552年にはすでに優れた製本業者として知られていた²⁵。彼は1555年に印刷所をカメルストラート（Kamerstraat）に開設して、第一冊目としてヴェネツィアの人文主義者ブルート（Bruto, Giovanni Michele, 1517-1592）によるイタリア語とフランス語対訳教科書『良家の子女の読本』（L'Institution d'une Jeune Fille de Noble Maison）を印刷した²⁶。1576年に書店をカメルストラート（Kamerstraat）に残して、印刷所をフライダフマルクト（Vrijdagmarkt）広場に移転して、豪壮な印刷所兼家屋を建設した²⁷。しかしながら、同年スペインによるアントウェルペン占拠、いわゆる「スペイン人の逆上」（Spanish Fury）が勃発した際には、プランタンはパリへ逃れていたため、その間は印刷所の活動は停滞した。プランタンは、『多言語聖書』（Biblia sacra Hebraice, Chaldeice, Graece et Latine. 1569-1573）やオルテリウス（Ortelius, Abraham, 1527-1598）『世界図』（Theatrum orbis terrarium. 1579）等の数々の印刷出版史上の記念碑的な書物を刊行した。

モレトゥスは、リール出身でアントウェルペンに移住した織物商の家に生まれ、14歳からプランタン印刷所で徒弟として修業し、書籍販売と印刷を学んだが、人文主義の風潮の中でギリシア語とラテン語を学び、さらにフランス語、フラマン語、スペイン語、イタリア語、ドイツ語を修得して、各国の印刷業者や学者と書簡のやり取りができるまでになった。ラテン語を修得したことで、自身のオランダ語名 Moerentorf をラテン語形 Moretus に変更して活動するようになった。彼はプランタンの信任厚く、書籍販売を任されて、プランタンに代わってフランクフルトの書籍市に参加するようになった。1570年にプランタンの次女マルチヌ（Plantin, Martine, 1550-1616）を娶り²⁸、プランタン印刷所の片腕となった。1589年にプランタンが亡くなるとプランタン印刷所を相続して、印刷所の発展に尽力した。

表1～2で示したように、アントウェルペンではプランタンとモレトゥスの出版数が圧倒的に多く、ページ付け本の比率も比較的高く、アントウェルペンのページ付け印刷の発展に極めて大きな影響を与えたことは明らかである。そのため、彼らの出版数の推移とページ付け本の比率を図3に示す。

プランタン印刷所では1564年からページ付け本の印刷が急増して、急激にその比率が高まったことがわかる（図3）。図2と図3で示される1560年代のページ付け本の比率の急激な増加が一致していることが判明する。つまり、プランタン印刷所でのページ付けの取組みがアントワープ全体に大きな影響を及ぼしていたのである。図3に示すように、1560年代後半から70年代前半には印刷所内の比率は60%から70%で推移するが、アントウェルペン全体に占めるプランタンの比率が80%に達することもあった。しかし、上述のように1577年から出版数が減少すると、印刷所内のページ付け本の比率は下降し、1580年代に出版数が回復してもページ付け本の比率は30%から40%で低い。モレトゥスが印刷所を引き継ぐと、印刷所内ページ付け本の比率は再び上昇し、一時は90%に達するが、プランタン印刷所の出版数は漸減し、アントウェルペン全体に占める比率も40%にまで低下した。しかしながら、図1ではモレトゥスの出版数の減少を他の業者がカバーして

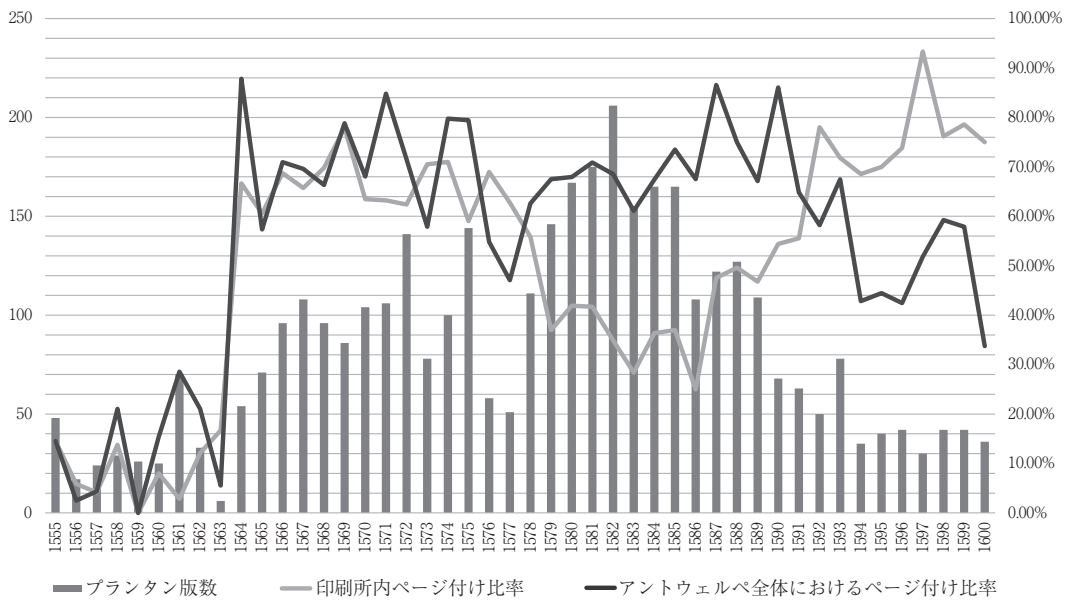


図3 プランタン印刷所の出版の推移

いるため、アントウェルペン全体の出版数は低下傾向を示していない。

以上のような分析から、プランタンが存命中には、変動はあるもののアントウェルペン全体のページ付け本の大半をプランタンが占めていたが、モレトゥスの時代には出版数自体が減少したため、アントウェルペン全体に占めるページ付け本の比率も減少していたことが判明した。しかし、1590年代には他の印刷業者は出版数を減らすことなく維持して、ページ付け印刷も行っていたため、ページ付け本の比率に大きな変化はなかった。

8. ページ付け本の著者および統一タイトル

アントウェルペンでページ付け印刷された本の著者および統一タイトルを表3に示す。ここではプランタン印刷所がこれらのページ付けにどの程度貢献していたかがわかるようにプランタン版の比率も併せて示した。ページ付けの版数順では、聖務日課、ミサ典書、トリエント公会議集等を含むカトリック書 (Catholic Church) が最も多く 254 版に上る²⁹。254 版のうちプランタンは 243 版 (95.67%) を刊行しており、カトリック書はプランタンの独壇場であったことが判明する。次が、聖書、旧約聖書、新約聖書、聖書各書を含む Biblia であり、合計 111 版である。プランタンはそのうちの 73 版 (65.77%) を刊行していた。

著者ではスペインの神学者グラナダ (Granada, Luis) が 71 版で最上位にある。グラナダはキリシタン版『ぎやどぺかどる』と『ヒイデスの導師』の著者であり、16 世紀後半に広く読まれた。グラナダの著作の 59.66% がページ付け本であり、そのうちの 92.96% がプランタン印刷所で印刷さ

表3 アントウェルペンのページ付け本の著者および統一タイトル（30版以上）

著者・統一タイトル	ページ付け 印刷期間	ページ付け 本版数	ページ付け 本比率	プランタン 版数	プランタン 版の比率
<i>Catholic Church</i>	1555-1600	254		243	95.67%
<i>Biblia</i>	1520-1600	111		73	65.77%
Granada, Luis de, 1504-1588	1572-1600	71	59.66%	66	92.96%
Verrept, Simon, 1522-1598	1553-1600	69	58.47%	31	44.93%
Lipsius, Justus, 1547-1606	1569-1600	62	28.05%	61	98.39%
Cicero, Marcus Tullius, 前 106-43	1534-1596	58	36.94%	36	62.07%
Valerius, Cornelius ab Auwater, 1512-1578	1566-1596	57	46.34%	54	94.74%
Erasmus, Desiderius, 1466-1536	1519-1583	54	12.80%	6	11.11%
<i>Philip II, King of Spain</i> , 在位 1556-1598	1570-1595	52		47	90.38%
Arias Montano, Benito, 1527-1598	1568-1599	49	71.01%	48	97.96%
Costerus, Franciscus, 1532-1619	1586-1600	47	94.00%	34	72.34%
Canisius, Petrus, 1521-1597	1566-1599	39	48.75%	38	97.44%
Despautère, Jean, 1546-1520	1528-1597	32	28.83%	16	50.00%
Topiarus, Aegidius Dominicus, 1579歿	1567-1576	32	82.05%	28	87.50%
Clenardus, Nicolaus, 1495-1542	1535-1598	31	75.61%	16	51.61%
Ovidius Naso, Publius, 前43-後17	1545-1598	30	32.97%	26	86.67%

*イタリックは統一タイトル

れたものであった。次のフェレプト（Verrept, Simon）は、カトリックの司祭・神学者であり、トリエント公会議後の祈禱書を編纂した。アントウェルペンで刊行された彼の著作の 58.47%にあたる 69 版にページ付けが行われたが、プランタン版はそのうちの 44.93%にすぎない。

続いて、人文主義者リプシウス（Lipsius, Justus）である。彼は古典学、法学、歴史学を研究した人文主義者であるが、アントウェルペン全体ではわずか 28.05%（62 版）しかページ付けで印刷されなかった。しかし、彼はプランタンの友人であったことから³⁰、62 版のうち 61 版がプランタンでページ付け印刷されるという特異な値を示した。

次に、古代ローマの哲学者キケロ（Cicero, Marcus Tullius）であり、古代の著述家としては 15-16 世紀に最も多くの版が刊行され、ページ付け本の中心的な著者であったが、アントウェルペンでは 36.94%に当たる 58 版しかページ付けされなかった。プランタン版はそのうちの 62.07%に当たる。次が人文主義者ワレリウス（Valerius, Cornelius ab Auwater）であり、アントウェルペン全体の 46.34%（57 版）がページ付け印刷され、プランタン版が 94.74%を占めた。

続いて、ロッテルダム出身のエラスムスである。16 世紀全体を通してみると、アントウェルペンではエラスムスのページ付け本は決して多くなく、54 版にすぎない。USTC によれば、アントウェルペンではエラスムスの編著書は 422 版刊行されたが、1550 年までにそのうちの 77.49%に当

たる 327 版が刊行されており、16 世紀後半にはエラスムスの出版はかなり減少していたことがわかる。プランタンもエラスムスには関心が薄く、ページ付け印刷はわずか 6 版にとどまった。アントウェルペンのページ付け印刷はエラスムスから始まったが、実際にはページ付け本の数は非常に限られていたことが判明した。筆者の調査では、16 世紀バーゼルにおけるエラスムスのページ付け本は 551 版であり、バーゼルのページ付け本全体の 13.5% を占めている。リヨンで 1559 年までに刊行されたエラスムスのページ付け本は 140 版で、この期間のリヨン全体のページ付け本ではキケロと聖書に次ぐ多さで、全体の 3.5% を占めていた。16 世紀ケルンではエラスムスのページ付け本は 135 版であり、ページ付け本の筆頭であり、全体の 7.5% を占めている。アントウェルペンでは上記の通り 54 版であることから、ページ付け本全体のわずか 1.63% に過ぎない。これらのページ付け印刷の先進地と比べて、アントウェルペンでは異なる傾向を示していることが判明した。

次はスペイン王フェリペ 2 世 (Philip II, King of Spain) の命で刊行された政令や布告の類である。現在 USTC では、この著者名で検索ができなくなっているため、全体の版数がかめない。ページ付け本 52 版のうち 47 版がプランタンによるものであった。

以下、ページ付け比率が高かった著者として、アリアス・モンターノ (Arias Montano, Benito, 1527-1598) を挙げなければならない。彼はスペインの神学者で人文主義者、王宮修道院エル・エスコリアル (El Escorial) の図書室の司書であり、フェリペ 2 世に命じられて『多言語聖書』出版のため、1568 年からプランタン印刷所で編集を監督した。彼はプランタンの良き友となり、彼のページ付け本の 97.96% がプランタンで印刷された。

続いて、全出版数の 94% がページ付け本であったコステルス (Costerus, Franciscus, 1532-1619) はイエズス会の神父、神学者であり、カトリック信仰に関する多くの手引書を著し、その大半がページ付けで印刷された。47 版中 34 版がプランタンから刊行された。そして、トピアリウス (Topiarius, Aegidius Dominicus, or Priele, Gilles vanden, 1579 歿) はドミニコ修道会の僧侶で、福音書の解説が頻繁に刊行され、その 82.05% がページ付けで印刷された。プランタン版はその 87.5% を占めた。最後がクレナルドゥス (Clenardus, Nicolaus, or Cleynaerts, Nicholaes, 1495-1542) である。彼はギリシア語学者、神学者で、多くのギリシア語学習書を著した。31 版がページ付けで刊行されたが、プランタンはその半数の 16 版に過ぎない。

以上のように分析してみると、アントウェルペンで印刷されたページ付け本の大半はカトリック書である。リプシウスやアリアス・モンターノのようにプランタンと非常に近い関係にあった人文主義者の著作は例外的にページ付けで印刷されたが、エラスムスでさえ 16 世紀後半には出版数が減少し、プランタンはわずか 6 版しかページ付け本を刊行しなかった。また、ラテン語の模範でもあったキケロもアントウェルペンではあまり多くの版が出版されたわけではなかった。それよりもスペインが推し進めた対抗宗教改革の潮流の中でアントウェルペンでは、プランタンがカトリック書をページ付けで刊行したことで、ページ付け印刷にもカトリックの影響が強く反映されたと思なすことができる。

9. 近代的標題紙の登場

アントウェルペンでは近代的標題紙が登場したのは非常に早く、上述の1519年ヒレン刊行のエラスムス『日常会話文例集』が最初である。本書第1葉表に、著者名、書名、印刷地、印刷者、印刷年が明記されており、近代的標題紙の要素を備えている（図1）。

標題紙には以下の記述がある。

FAMILIARVM COLLO|QVIORVM FOR-|MVLAE, | Et alia quaedam, per Des. Erasmū |
Recognita. | Anduerpiae In aedibus Michae-|lis Hillenij Hoochstratani, | An. M,D,XIX. Cl' Apri.

（ロッテルダムのエラスムスによる日常会話文例集その他。アントウェルピア、ミカエル・ヒレニウス・ホーホストラテンの家にて、1519年4月1日）

ちなみに、彼は本書の巻末に以下の奥書を印刷しており、標題紙の刊記の情報とは若干異なる情報を印刷している。

Impressum Antuerpiae In intersignio Rapi Per me | Michaelem Hillenium Hoochstratanum. |
Anno, M, CCC, xix, mens. May.

（Rapi（カブラ）の商標のもとで私ミカエル・ヒレニウス・ホーホストラテンによって1519年5月に印刷された）

印刷刊行の月を、標題紙では4月1日（Cl' Apri.）と明記しているが、奥書では5月としている点が異なる。また、標題紙ではアントウェルペンの綴りが‘Anduerpiae’となっているが、奥書では‘Antuerpiae’となり、訂正されている。

前述したように本書は1518年のバーゼル版を模倣したものであるが、バーゼル版の標題紙には著者名とタイトル、フローベンの商標（木版縁飾の中）が印刷されているのみである。フローベンは1519年に『エラスムス著作目録』（*Lucubrationum Erasmi Roterodami index*. 4to）（VD 16, F 3054）をページ付けで自ら編集刊行して、そのタイトルページに、本来であればタイトルページの裏面に印刷する「フローベンが親愛なる読者へ」（*Io. Frobenius Amico Lectori S.*）をタイトルページの下部に印刷し、その最後に‘Basileae quarto Calend. Aprilis. Anno M.D. XIX.’（バーゼル、1519年3月29日）と印刷地、印刷年月日を記したが、印刷者名は明記しなかった。バーゼル最初のページ付け本に近代的標題紙が備わった例は、1520年バーゼルのフローベンが刊行したエラスムス『反蛮族論』（*Antibarbarorum*）（VD 16, E 1977; VD 16, E 1978）とエラスムスが編集したカトー（*Cato, Marcus Porcius*, 前95-46）『道徳論集』（*Disticha moralia*）（VD 16, C 1606）、ペトリ（*Petri, Adam*, 1454-1527）が同年に刊行したルター『著作集』（*Lucubrationum*）（VD 16, L 3411）

である³¹。これら3書では上記のような形式ではなく、例えば『反蛮族論』（VD 16, E 1977）では‘BASILEAE APVD IO. FROBENIVM AN. M.D.XX’（バーゼルのヨハン・フローベにて、1520年）という刊記をタイトルページ最下段に印刷した。

つまり、アントウェルペンの1519年版は、バーゼルの例よりも1年早く刊行されたページ付け本に近代的標題紙が備わった例とすることができる。ヒレンが早期に印刷地、印刷者、印刷年を標題紙に記載した契機は何であったろうか。

アントウェルペンでは近代的標題紙の登場は早かったが、それがすぐに広まったわけではなく、1525年頃から少しずつ増えはじめ、1530年代に広がりを見せたが、コロフォンは付けられていた。プランタン印刷所では近代的標題紙を備えた本でもコロフォンを16世紀末まで維持した。

10. ページ付け本の判型について

アントウェルペンではどのような判型の本にページ付けが行われたのか考えてみたい。表4に示すように、アントウェルペンでは八折判（8vo）の割合が47.26%で、圧倒的に高く、次いで四折判（4to）が17.55%、十六折判（16mo）が13.6%である。そして二折判（folio）が9.65%、十二折判（12mo）が4.49%と続く。アントウェルペンでは四折判が最も早く登場し、八折判が続いた。そして、十六折判が早くに登場し、二折判はむしろ遅かった。ページ付け本の主流が八折判にあったことは明らかであるが、多様な判型にページ付けが行われていた。

アントウェルペンの判型を、1600年までの調査が終了しているバーゼルとジュネーヴの判型と比較してみよう。表5に示すように、バーゼルでは八折判が51.18%でやはり圧倒的に多く、次が

表4 アントウェルペンにおけるページ付け本の判型

判型	版数	期間	比率
folio	320	1535-1600	9.65%
4to	582	1519-1600	17.55%
4to oblong	59	1555-1596	1.78%
8vo	1,567	1520-1600	47.26%
8vo oblong	1	1586	0.03%
12mo	149	1550-1600	4.49%
16mo	451	1533-1600	13.60%
16mo oblong	1	1591	0.03%
18mo	3	1590-1595	0.09%
24mo	64	1564-1600	1.93%
32mo	11	1570-1593	0.33%
64mo	1	1561	0.03%

表5 バーゼルにおけるページ付け本の判型

判型	版数	期間	比率
folio	1089	1515-1600	24.30%
4to	590	1517-1600	13.16%
4to oblong			0.00%
8vo	2294	1517-1600	51.18%
8vo oblong			0.00%
12mo	21	1522-1598	0.47%
16mo	86	1534-1599	1.92%
16mo oblong			0.00%
18vo			0.00%
24to			0.00%
32mo			0.00%
64to			0.00%
不明	1		0.02%

表6 ジュネーヴにおけるページ付け本の判型

判型	版数	期間	比率
folio	309	1551-1600	10.65%
4to	286	1541-1600	9.86%
4to oblong	3	1582-1594	0.10%
8vo	1802	1536-1600	62.10%
8vo oblong	1	1597	0.03%
12mo	27	1565-1600	0.93%
16mo	454	1543-1600	15.64%
16mo oblong			0.00%
18vo			0.00%
24to	8	1560-1598	0.28%
32mo	10	1550-1569	0.34%
64to			0.00%
不明	2		0.07%

二折判で24.30%，続いて四折判で13.16%となり，十二折判と十六折判は極めて少ない。二折判が最初に登場し，続いて四折判と八折判が同じ年に登場した。そして，十二折判が登場し，その後十六折判が続いた。バーゼルでは判型のバリエーションが非常に限られていたことが判明する。

一方，表6に示すように，ジュネーヴではやはり八折判が圧倒的に多く62.1%を占め，次が十六折判で15.64%であり，二折判がそれより少なく10.65%，四折判が9.86%となっている。十二折判はわずかであった。八折判が最初に登場し，四折判と十六折判が続き，二折判は16世紀後半になってようやく登場した。

つまり，どのような判型をページ付け本に採用するかという点は，各地で八折判を中心に行っているが，それ以外ではそれぞれの都市で印刷される書物の分野や刊行時期によって変化していたと考えることができる。

ページ付け印刷をする場合，判型によって組版でページ番号の置き方が異なってくるため，初期のページ付け本ではページ番号に多くの誤植と番号の位置の間違いが多数見られる。ページ番号に誤植がない本の方が珍しい。ページ番号の位置はアルドのAタイプが圧倒的に多く，表面（recto）ではヘッドライン右端，裏面（verso）ではヘッドライン左端であるが，時折裏面でヘッドライン右端になったものも散見された。ページ付け印刷に慣れてくると番号の位置の間違いはほとんどなくなるが，番号の誤植はなかなか減らなかった。

16世紀の初めには二折判や四折判が八折判よりも一般的な判型である。アルド・マヌーツィオは最初に二折判にページ付けを行い，続いて八折判，そして四折判にページ付けを行った。アルドの八折判古典叢書が各地に普及すると，各地ではそれを模倣した八折判の古典が印刷されるようになり，人文主義の普及とともに八折判が16世紀の印刷本の主流となった。その中で八折判にペー

ジ付けが最もよく行われるようになったと考えられる。そして、十六折判のページ付け本の登場がアントウェルペンで1533年、バーゼルで1534年と比較的早いのが、アントウェルペンでもジュネーヴでも二折判のページ付けが遅いことはなぜだろうか。バーゼルでは最初のページ付け本が二折判であり、二折判でページ付けが普及した。一方、十二折判のページ付け本はバーゼルでは非常に早い例があるが、アントウェルペンでもジュネーヴでも16世後半になって登場した。十二折判は組版を作る際に折り方に工夫が必要となり、十六折判より印刷工程が複雑であるため、ページ付けも容易でなかったはずである。

その他、アントウェルペンでは oblong 判（横長本）へのページ付けがしばしば見られる。これらは楽譜が入った音楽書が大半である。音楽書は各音域のパートがそれぞれ独立した本として刊行された。音楽書の大半ではフォリエーションが多く使用され、ページ付けは実際には限られていた。

11. まとめ

アントウェルペンにおけるページ付け印刷は1519年に始まり、16世紀後半に30-40%に上昇して比較的発展するが、その発展を支えていたのはプランタン印刷所であった。ページ付けを熱心に行ったその他の業者もいたが、プランタン印刷所の精力的な印刷出版活動のため、他の業者は主流にはならなかった。しかし、プランタンでもページ付け本は全体では50%以下であり、決して支配的ではなかったため、バーゼル、リヨン、ケルンのようにページ付け印刷が80%に達するような発展は見られなかった。アントウェルペンでは、ページ付け印刷がエラスムス『日常会話文例集』から始まったが、16世紀後半にはカトリック書や聖書等がページ付けの中心となり、人文主義書へのページ付けは、リプシウス等の例外はあるが、むしろ少数となり、他の印刷出版中心地とは異なる様相を呈していた。

アントウェルペンにおける近代的標題紙の登場は現時点ではバーゼルより早い1519年である。そのきっかけが何であったのかは今後検討を要する問題である。人文主義書も盛んに出版したヒレンの独自の工夫であったのか、バーゼルから何らかの影響があったのかは今後調査を進めて解明していかなければならない。アントウェルペンでは、このような標題紙は1525年から徐々に登場し、1530年代に広まったが、奥書は16世紀末まで消滅しなかった。アントウェルペンでは16世紀後半にページ付け印刷が発展したことから、近代的書物形態の発展は16世紀後半になってようやく普及したとみなされる。

ページ付け本の判型は八折判が圧倒的に多く、二折判へのページ付けは遅く、一方で十六折判等の小型本への広がりが見られた。なお、アントウェルペンでは多様な判型にページ付けが行われたことも特徴として挙げなければならない。

今後の課題は、なぜページ付けが必要であったのかという根本的な問題を解明すること、近代的表題紙の登場と出版規制との関係を解明すること、近代的書物形態の登場と発展は16世紀のどのような思潮と密接にかかわっていたのかということを経営全体で考察することで

ある。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP17K00454 の助成を受けたものです。

付記

本稿は、2021 年度日本図書館情報学会春季研究集会（2021 年 5 月 15 日青山学院大学相模原キャンパス）で発表した「16 世紀アントワープにおける近代的書物形態の発展について」（『2021 年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』 pp. 21-24）を大幅に訂正増補したものである。

【注】

- 1 拙稿「西洋におけるページ付けの起源と発展過程について」『学術研究（人文科学・社会科学編）』66 号，2018，p. 67-83.
- 2 Yukishima, K., *Pagination printed by Aldus Manutius, Bibliothecae*, vol. 9, no.1, 2020, p. 1-21.
- 3 拙稿「16 世紀前半バーゼルにおける近代的書物形態の発展について：ページ付け本の発展プロセスを中心に」『学術研究（人文科学・社会科学編）』67 号，2019，p. 71-84.
- 4 拙稿「フランスにおけるページ付け印刷の開始と発展について」『学術研究（人文科学・社会科学編）』68 号，2020，p. 51-73.
- 5 拙稿「16 世紀ケルンにおけるページ付け印刷の発展について」『学術研究（人文科学・社会科学編）』69 号，2021，p. 59-74.
- 6 拙稿「ジュネーブにおける近代的書物形態の発展について」『早稲田大学図書館紀要』69 号，2022（印刷中）
- 7 Universal Short Title Catalogue, URL: <https://www.ustc.ac.uk/>（2021-08-21 参照）.
- 8 Nijhoff, W., M.E. Kronenberg, *Nederlandsch bibliographie van 1500 tot 1540*, s'Gravenhage: Nijhoff, 1923-71, 6 vols.
- 9 1541 年以降の低地諸地方あるいはベルギーの印刷本の書誌には *Bibliotheca Belgica* (Bruxelles: Culture et civilisation, 1975-79, 7 vols.) と *Belgica typographica 1541-1600* (Nieuwkoop: B. de Graaf, 1968-94, 4 vols.) があるが、前者はアントウェルペンのみの調査は困難であり、後者は対照事項の記載が不十分で本研究には有益でない。
- 10 Koninklijke Bibliotheek van België, Bibliothèque royale de Belgique, Algemene catalogus, URL: <https://opac.kbr.be/Library/home-fr.aspx>（2021-8-21 参照）.
- 11 Voet, L., *The Plantin Press (1555-1589): a bibliography of the printed and published by Cristopher Plantin at Antwerp and Leiden*, Amsterdam: Van Hoeve, 1980-83. 6 vols.
- 12 Imhof, D., *Jan Moretus and the continuation of the Plantin Press: a bibliography of the works published and printed by Jan Moretus I in Antwerp (1589-1610)*, Leiden: Brill, 2014. 2 vols.
- 13 The British Library, Incunabula Short Title Catalogue, URL: <http://www.bl.uk/catalogues/istc/>（2021-8-21 参照）.
- 14 'Dirk Martens', CERL Thesaurus, URL: <https://data.cerl.org/thesaurus/cni00039251>（2021-8-21 参照）; Vanautgaerden, A., *Érasme typographe: humanism et imprimerie au début du XVIe siècle*, Genève: Librairie Droz, 2012, pp. 43-50, 425-435.
- 15 15 世紀に低地諸州最大の印刷出版地となったデフエンテルは、16 世紀になると人文主義書を中心に活発な出版を行ったが、1520 年代以降衰退した。USTC では 16 世紀全体で 1,107 版が登録されているのみである。
- 16 桜田美津夫『物語オランダの歴史：大航海時代から「寛容」国家の現代まで』中央公論新社，2017，pp. 3-7。
- 17 前掲書，p. 6。
- 18 森田安一編『スイス・ベネルクス史』（新版世界各国史 14）山川出版社，1998，pp. 354-355; アンドルー・ペディ

- グリー著、桑木野幸司訳『印刷という革命：ルネサンスの本と日常生活』白水社、2015、pp. 347-349。
- 19 Clair, C., *Christopher Plantin*, London: Cassell, 1960, pp. 15-16.
 - 20 USTC 440800, URL: <https://www.ustc.ac.uk/editions/440800> (2021-08-21 参照)。
 - 21 Clair, C., op. cit., pp. 150-151.
 - 22 USTC の対照事項は 'ff. [30]' と記述され、ページ付け本とは認識できないが、ヘント大学図書館の書誌記述では 'Xxxvij, [1], [1 blanco] p.' と明記されている。なお、NK ではページ付け本として記載されている。
 - 23 ヒレンは 1518 年に『日常会話文例集』を印刷した (NK 400 = USTC 442288) が、現存していないため、それがページ付け本であったのかは確認できない。
 - 24 ヒレンが 1519 年に刊行した版 (USTC 452734) はヘント大学所蔵本が電子化されて、Google.books で見ることが可能である。一方、フローベンの 1518 年は VD 16 で画像を確認することができる (VD 16, URL: https://www.gateway-bayern.de/ToucPoint_touchpoint/start.do?SearchProfile=Altbestand&SearchType=2 (2021-08-21 参照))。
 - 25 Clair, C., op. cit., pp. 4-14.
 - 26 Ibid., pp. 14-15.
 - 27 Ibid., p. 230. フライダフマルクトの印刷所はその後 19 世紀まで活動して、アントウェルペン市に寄贈され、プランタン＝モレトゥス印刷博物館となり、今日に至るまで 16 世紀からの印刷資材、機械、文書、図書館を保存している。Cf.: Voet, L., *The golden compasses : a history and evaluation of the printing and publishing activities of the Officina Plantiniana at Antwerp*, Amsterdam : Vangendt, 1969-1972.
 - 28 Clair, C., op. cit., p. 19.
 - 29 USTC では 2021 年 3 月の時点では上記の統一タイトルでコントロールされていたが、2021 年 8 月現在、統一タイトルでの検索ができなくなっているため、全版数が確認できない。そのため、統一タイトルについてはページ付け比率が算定できない。
 - 30 Clair, C., op. cit., p. 153.
 - 31 拙稿「16 世紀前半パーゼルにおける近代的書物形態の発展について：ページ付け本の発展プロセスを中心に」pp. 78-79 では、パーゼルにおけるページ付け本と近代的標題紙の出会いをターリオが 1523 年に刊行したアウソニウス『論集』(VD 16, A 4385) としたが、その後 1520 年刊行の 3 書をデジタル画像で確認した。